

「一回性の人生」

梁 石日著



著者は一九三六年生まれの在日二世。独自の視点から問題作を発表し続けている。

青年期は同人誌で詩を書いていたが、組織(在日本朝鮮人総連合)を批判したこと、政治の渦に巻きこまれ挫折。その後、美術印刷業を起すが、現在の金額にして十億の負債を抱え倒産した。仙台、東京と放浪の末、タクシー運転手として生活をたて、二度の衝突事故にあったのを機に退社、ついに一冊の小説を出版したのは四十五歳の時である。

この本は、そんな彼が四十六の項目にわたり具体的に自らの体験を引き出しながら、不安にたえず現代人に「いかに生きるか」を問うた語り下ろしのエッセー集である。

ここで一貫して流れるのは彼の「日本人」を見る目の確かさと温かさだ。タクシー運転手時代、酩酊し欲求不満をぶちまけるサラリーマンに、管理システムにからめられた心身

生き方再考するヒント凝縮

の消耗と苦しみを感じ、高度経済成長のツケがそろそろ支払われる時期がきたことを察したという。そして彼に悪態をつく客にある種の同情を抱いていたと語る。

また、「生きぬく力」とは「自己肯定力」だと言いきる。もちろん昨今はやりの安易なプラス思考ではない。過去を過去としてとれだけ正確に「再生」し、自分を客観的に見られるかが鍵であり、その分金を生きる力につながるとする。過去を歪曲したときから人は現在の自分と向き合えなくなるといふ言葉には、個のレベルを超え、朝鮮と日本との国家関係においても説得力がある。

さらに作家の目は、現代の若者をとらえる。大量消費の中で育った彼らの傷つきやすさ、半面残酷な顔をのぞかせる根を著者は「身体空洞化」と呼ぶ。個のルールが確立されないまま個室や携帯などが入り込むことで人との断絶が生まれる。生身の体の触れ合いが急激に消えた環境変化は大きい。これら共感できるいくつかの言葉を聞くと、同じアジア人としての作者の血に浸っていることに気づく。日本にいながらにして自分を少し離れた場から再考するヒントがつまっている書だ。評・宮本誠一(小規模作業所「夢屋」代表)

講談社・1680円

◇やん・そぎる 1936年大阪生まれ、作家。